

## 【p 46～p 49】 負けへんで ―川本幸民―

### 1 資料活用にあたって

- 46ページ11行目～47ページ3行目までは、川本幸民の業績について教師が要点を説明し、46ページ4行目から発問構成する進め方もある。
- 川本幸民の探求心に焦点をあてれば内容項目はA(6)であるが、蘭学を通してすでに様々な知識を得ていた幸民が、日本人の一人として「西洋に負けるものか」という気持ちを支えにして研究に取り組んだことに焦点をあてて内容項目はC(17)で扱う。
- 内容項目C(17)における愛国心の扱いについては、郷土を愛する心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることが大切である。したがって、幸民は西洋に対抗意識はもっていたが、排他的な考えで競争しようとしていたのではなく、西洋と比較しながら自国の学術・研究レベルを向上させ、日本人に自信をもたせようとしていたことに着目させることが大切である。

### 2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公(幸民)の生き方を貫くものを考える資料であり、幸民の立場で場面を捉えていく。(子どもが「幸民」になって考えられるように発問を工夫する。)
- このような資料は、様々な苦労の場面で、それを乗り越えさせる原動力になったものを考える。本資料では、藩主隆国の言葉を励みとして「日本人の一人として西洋に負けるか」と、学問・研究に取り組み、ペリーがビールをふるまったことに対抗意識を燃やしてビール作りに苦心した、日本を愛する幸民の生き方について考えさせる。

### 3 読み物資料の素材について

#### 【参考文献等】

- ・ 『黒船なにするものぞ ―蘭学者 川本幸民―』 柳田昭、朝日ソノラマ、1998年
- ・ 『蘭学者 川本幸民』 司亮一、神戸新聞総合出版センター、2004年
- ・ 『川本幸民の遠征奇器術解説』 足立元之、NPO歴史文化財ネットワークさんだ、2010年
- ・ ふるさと読本1『川本幸民物語』 高田義久、三田市、2008年
- ・ さんだ人物誌1『川本幸民』 高田義久、2008年

#### 【資料の展示】

- ・ 歴史資料収蔵センター 〒669-1532 三田市屋敷町12-27 TEL 079-562-7233
- ・ 三田ふるさと学習館 〒669-1532 三田市屋敷町7-33 TEL 079-563-5587

#### ○ 川本幸民について

- ・ 川本幸民は日本で初めてビール醸造に成功した。その復刻版が生誕200年にあたる2010年に初めて販売された。当時のように試飲会も催された。また、「化学」という言葉を作った幸民の業績に続こうと「川本幸民につづけ！さんだ子ども科学教室」も行われている。
- ・ 幸民の口癖は「英才は彊力(彊力) 勉勵の別名なり」だった。知的好奇心が強く、書物上だけで知識でなく、実際に作ったり実験したりする強い探求心の持ち主で、学ぶことを惜しまなかった。
- ・ 幸民は有名な蘭学者坪井信道に入門、医学や化学、物理学などを学んだ。同期には、生涯の友であり適塾を作った緒方洪庵がいる。幸民は1857年、薩摩藩に召し抱えられ、薩摩藩の武士に学問を教えたり、多くの本の翻訳をしたりした。島津斉彬は幸民の知識を高く評価し信頼もしていた。学者としても名声を得た幸民は、46歳で幕府の洋学研究教育機関「蕃所 調所」に教授手伝いとして迎えられ、後に教授に昇進した。幕府が崩壊すると、江戸から三田に帰郷し、息子の清次郎とともに英蘭塾を開き、自分の身に付けてきた知識を広げた。
- ・ 幸民は自分が研究し翻訳した本を出版することで、人々に西洋の最新の学問や道具を紹介した。特に「遠生奇器述」で写真機・マッチ・蒸気機関車・蒸気船・電信機などの事を図入りで説明した。

## 4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ 国を思う心 C (17)
- ・ **資料の概要** ・ 幸民は、藩主九鬼隆国の言葉を励みに「日本人の一人として西洋に負けるものか」という決意で学問・研究に取り組む。ペリーが来航した際にビールをふるまったことを耳にして対抗意識をもった幸民は、苦心してビールを完成させ、盛大な試飲会を開く。幸民は、愉快にビールのお話をしている江戸の人々をいつになく優しい目で見つめるのであった。
- ・ **ね ら い** ・ ビール作りを通して、外国にできるものは日本にもできることを証明した幸民の生き方を通して、郷土やわが国の発展に尽くした先人の努力を知り、それを継承発展させていく自覚を持ち、郷土や国を愛する道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・ 今日の資料に興味を持つ。	「負けへんで」と思って何かに取り組んだことはありますか。
展 開	・ 資料の範読を聞きながら、黙読する。 ・ 藩主から国のために学問に励むよう言われた時の主人公の気持ちを考える。	藩主隆国から「この国のために学問に敢然といどめ」と言われた幸民は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 隆国様のありがたい言葉に報いるようがんばろう。 ・ 西洋の学問に追いつき、日本の学問のすごさを見せてやるぞ。 ・ 西洋に負けるものか。
	・ 自分もビールを作ってやろうと思立った主人公の気持ちを考える。	幸民が「よし、自分もつくってやろう！」と思立ったのは、なぜでしょう。 ・ 西洋人に作れて日本人に作れないわけがないと思ったから。 ・ うまい飲み物を作って、「西洋にはかなわない」というみんなの気持ちを打ち消してやろうと思ったから。 ・ 日本人に自信を取り戻してほしいと思ったから。
	・ ビールのことを話題にしている人々を見た時の主人公の気持ちを考える。	愉快にビールのお話をしている江戸の人々をやさしい目で見つめる幸民は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・ みんなに喜んでもらえてよかった。 ・ 日本人もやれば西洋に追いつけることをわかってもらえた。 ・ 隆国様の言われた「この国のために敢然と挑む」ことができた。
終 末	・ 感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

藩主隆国の言葉がきっかけとなり、「日本の国のために」という意識が主人公に起こっていることをおさえる。

ペリーがビールを振る舞った話を耳にしたことがきっかけとなり、「日本のために」という意識が高まり、主人公が「ペリーに負けへんで」という気持ちでビールづくりに取り組んだことをおさえる。

「日本の国の発展のために力をつくしたい」という心情が主人公の研究を支えたことをおさえる。